

導きのアニムス
—— ル=グウィン *The Tombs of Atuan* ——

Le Guin's *The Tombs of Atuan*:
Animus as the Deliverer of a Repressed Female Self

宮 地 信 弘
(Nobuhiro Miyachi)

ファンタジー文学の偉業の一つであるアーシュラ・K・ル=グウィン (Ursula K. Le Guin) のアースシー物語 (Earthsea Cycle)、その第2巻『アテュアンの墳墓』 (*The Tombs of Atuan* 1970) は、一人の女性が損なわれた女性性を回復していくファンタジーである。あるいは、ユング心理学で言う個性化の過程を経て真の自己を見出すファンタジー、もっと簡単には、魂の再生のファンタジーと言ってもいいだろう。ル=グウィンは、アースシー3部作¹に共通する主題を「成人すること」 (coming of age)²と述べている。成人するとは、内なる成熟の危機と直面し、何らかの形で自己の内部に潜む巨大な力——ユング心理学的に言えば、無意識内に潜む自己の影——と対決して、それを自己のうちに創造的に統合することであろう。それが達成されたとき人は真の自己となり、社会的存在として生まれ変わることになる。すなわち、個性化の過程の乗り越えが問題となる。ユングは、「個性化」とは「心理的な個体・すなわち他から分離した分割し得ない単位・一つの全体・を作り出す過程」³と定義している。第1巻『アースシーの魔法使い』 (*A Wizard of Earthsea* 1968) において、ゲド (Ged) が自らの暗黒面と対峙し、魂の危機に直面しながらもそこに潜む影と対決し、それを自らの内に統合して自己の全体性を獲得して、かろうじて成熟の危機を乗り切ったように、第2巻では、一人の女性が暗く強力な無意識の

領域で窒息しかけた自らの生と本来の女性性を回復して、「心理的な個体」に至ることになる（Elizabeth Cummins はこのファンタジーを「女性の教養小説（female *Bildungsroman*）の伝統」⁴に即した小説と言う）。ただし、ここには男性的な力の導きが存在する。この小論では、ユング心理学を援用しつつその女性性回復の過程をたどってみたい。

監禁された生

主人公のテナー（Tenar）は成人になるまでその生涯を暗い死の領域に監禁されて過ごす。彼女は、アテュアンの墳墓を守る「聖なる巫女」（the One Priestess）が亡くなった日に生まれたがためにその生まれ変わりと思われ、5歳のとき強制的に両親のもとから引き離され、アテュアンの墓所に連れてこられる。6歳で「聖なる巫女の蘇り」（the remaking of the Priestess）の儀式を通して、テナーという名前を奪われ、アーハ（Arha : the Eaten One「喰われし者」の意）と呼ばれるようになる。名前が自己の本質を表すものであるとすれば、彼女は幼くしてすでにアイデンティティを剥奪されたことになる。すなわち、テナーという本来の自己を圧殺され、墳墓の巫女アーハという強要されたペルソナ（仮面・人格）のもとで影の生を生きることを強いられることになる。その後、彼女は二人の高等巫女サー（Thar）とコシル（Kossil）の監督のもとで10年間アテュアンの墳墓の巫女となるべく厳しい教育を受け、時満ちて成人となる15歳を迎えると、名実ともに聖なる巫女となり、その権威の印として地下墳墓の鍵を与えられる。以後その全生涯にわたって聖なる巫女として地下墳墓に住む「名もなき者たち」（the Nameless Ones）に仕えることが運命づけられる。その結果、外界とのつながりは一切絶たれ、数人の宦官を除き、女たちだけが共同生活を営むアテュアンの墓所で聖なる巫女として日々を過ごすうちに若いテナーの生は地下の暗闇に閉ざされ、太古から続く闇の力のもとで仮死の生を生きることを余儀なくされる。そして、彼女の本来の豊かな女性性は開花することなく、次第に枯渇していく。

まず、アテュアンの墳墓の空間的位置から見ておきたい。このアテュアンの墳墓の社会的・政治的構造もまた彼女の生を閉じ込める構造となっているからである。多くの島が浮かぶアースシー世界の東海域にあるカーガッド帝国 (Kargish Empire) は4つの島から構成されており、そのひとつがアテュアン島で、ここは多島海の中でも「古の大地の霊」の崇拜で知られ、その中心がこのアテュアンの墳墓である。この墳墓の中心には「玉座の間」(the Hall of the Throne) と呼ばれる古代の神殿があるが、屋根にはひびが入り、丸天井は崩れ、「名もなき者たち」へのかつての信仰が廢れるのに呼応するかのよう荒廃している。この「玉座の間」には女性しか入ることができず、その中央にある巨大な玉座には坐す者がなく、空虚な玉座となっている。

The throne itself was black, with a dull glimmer of precious stones or gold on the arms and back, and it was huge. A man sitting in it would have been dwarfed; it was not of human dimensions. It was empty. Nothing sat in it but shadows. (p. 2)⁵

あたかも巨人のために造られたかのような巨大な玉座には今や座す者がいない。本来座るべき王の不在とは、すなわち、男性権力の不在を意味しており、今や完全に女たちの宰領する空間と化している。聖なる巫女の蘇りの儀式もこの玉座の前で女たちだけで執り行われ、テナーは死と通底する地母神的な空間で生きることを余儀なくされる。すなわち、一人の健全な女性として成人する機会を奪われ、男性的ロゴスを知らずに成長することが運命づけられる。

その女性空間は、しかし、その外に広がる男性の権力構造の中で隔離された空間でもある。墓所のすぐ近くには、荒廃した「玉座の間」とは対照的に壮麗たる二つの神殿がある。それらは「神王の神殿」(the Temple of the Godking) と「兄弟神の神殿」(the Temple of God Brothers) と呼ばれ、カーガッド帝国の支配者の祖先を祀る神殿である。いずれも堂々たるもので、中でも現帝国の支配者である「神王」(Godking) の神殿は最も新しく、毎年金箔が貼りかえられ、豪華な威容を誇る。その威容は新しい時代における帝国の強大化と世俗

化、それに伴う「名もなき者たち」への信仰の衰退を意味している。その強大化する男性の権力によって女たちの情念的な力が封じ込められている空間がこの墓所なのである。この墓所は周囲を石壁に囲まれているが、それは墓所の巫女たちを守るかに見せて、その実、彼女たちを死の領域に隔離する石壁、いわば、女たちの力を封じ込める監禁の記号なのである。すなわち、帝国の拡大と共に強大化していく父権制社会の権力構造がアテュアンの墓所を取り囲み、女たちは死の力を鎮める生贄として男性権力によって奉納されている犠牲者なのである。

この墓所はかつて墓石が並び立っていた地上とその下に広がる暗黒空間の二重構造になっている。地上には、多島海世界が創造されたとき、大地が海から浮上してまだ漆黒の闇に閉ざされていた古代に建てられた9基の墓石がある。まっすぐに立っているものはわずかに1基のみで、他は傾き、2基は倒れ、古代信仰の衰退を物語っている。その真下の地下空間には「名もなき者たち」が棲息する地下墳墓 (undertomb) とそれにつながる複雑に入り組んだ迷宮が広がっている。迷宮にはいくつかの部屋があり、その一つの「大宝物の間」(the Great Treasury) にはこの墓所にある全ての財宝を凌ぐ宝物が保管されているという(魔法使いのゲドはそれを奪いにやってくる)。地下世界に息づき、そこを支配している「名もなき者たち」とは、すなわち、太古から連綿と続く死者たちの堆積した霊であり、光が創造される前から存在する原初の力である。彼らは極度に光を嫌い、それゆえ地下墳墓には一切の光が禁じられている。

15歳になって正式に聖なる巫女の権限を与えられたテナーは彼らに食された巫女アーハとしてその暗黒空間が彼女の生きる唯一の世界となる。その光のささない地下迷宮は監禁された彼女の生の記号であり、同時に彼女の内に潜む広大な無意識世界の表象でもある。彼女は出口なしの地下空間と、そしてその外側にある父権制社会の権力構造の両方によって社会的・政治的、そして心理的に監禁された状況にある。そして暗黒の地下世界に馴染むうちに無意識の闇が次第に彼女の魂に浸潤していき、一人の人間としての生は歪められ、女性としてのエロスも封殺されていく。彼女の生は、クレタの洞窟迷宮に閉じ込めら

れたミノタウロスにも似た怪物のごとき様相を呈していく。

しかし、生の充実への希求は本能的欲望にも近いもので、容易に消え去ることはない。彼女が無意識に深く包まれていくに連れて、他方では生の充実を希求する力もまた彼女の内で大きくなる。光が影を作り出すように、影もまた光を求め、産み出していくのである。第1巻の冒頭にあるように、「暗闇の中のみ、光はあり、死の中にこそ生はある」(only in dark the light / only in dying life) ののである。

アニムスの導き

そのような窒息状態からテナーを救い出すのは、物語的には、若き日のゲドである(ゲドはこのとき30歳くらい)。ユング心理学的には、魔法使いゲドに仮託された、彼女に内在する英雄的な男性原理である(そのためか、ゲドは彼女が脱出の決断を下すまでは個人的特徴を持たないただの「見知らぬ男」と表象される)。その男性的・ロゴスの原理が損なわれたテナーの心(サイキ)を、個性化の過程を経て、その全体性回復へと導いていく。その導きの過程は(1)見知らぬ男の出現(2)アーハテナーの教育(3)アーハテナーの混乱(4)テナーの選択と決断(5)過去の精算という5つの段階に分けられる。

テナーを自立へと導くゲドが若いセクシュアリティに満ちた男性であることも見逃してはならない。それはテナーのセクシュアリティの発動と深く関わるからである。ル=グウィンは、端的にこの物語の主題は「性」(sex)と言い、「より正確には、女性が成人することと呼んでもいいでしょう。誕生、再生、破壊、自由が主題です」と言う。

The subject of *The Tombs of Atuan* is, if I had to put it in one word, sex. There's a lot of symbolism in the book, most of which I did not, of course, analyze consciously while writing; the symbols can all be read as sexual. More exactly, you could call it a feminine coming of age. Birth, rebirth, destruction, freedom are the themes.⁶

ゲドという魔法使いは彼女の魂の深部に潜み、充実した生を求める彼女自身の男性的意志の力、すなわち、ユングの言うアニムスの力であると言っていいだろう。この物語では、ゲドはアーハ/テナーを個性化の道へ導いていくアニムスとして機能していると言うことができる。それは、ゲドにとって自己の分身であった影が彼を統一ある自己へ導いたように、アーハ/テナーの内に生まれて彼女を光へ導いていく彼女の創造的な分身でもある。

1. 見知らぬ男の出現

ゲドはアーハ/テナーが支配する地下世界に突然現れる。アーハ/テナーが自分の王国である地下墳墓に侵入者がいることに気がつくのは、厳しくはあったが彼女の味方もしてくれた高等巫女のサーが亡くなって、頻繁に地下の迷宮に出かけるようになった時のことである。いつものように迷宮を調べていると地下墳墓がほのかに灰色に浸されており、少し進むと洞窟内にかすかな光があることに気がつく。禁断の聖域に何者かが侵入し、しかも光を持ち込んでいるのだ。果たして男はどこから侵入したのだろうか。物語的には外からのみ開く「赤の岩戸」(the Red Rock Door) から侵入したことになっているが、男は突然どこからともなくそこに現れたかのような、あるいは以前からそこに棲みついていたかのような印象を与える。そうだとすれば、男はそれまでどこに潜み、また、なぜこの時に現れたのだろうか。

太古から連綿と続く死霊たちが息づくこの地下墳墓には巫女とその従者(宦官)以外に生きた者が入ることは許されない。入った者は死霊の怒りに触れ、即座に喰われることになる。では、なぜ男は喰われなかったのか。この地下墳墓がテナーの無意識世界の表象だとすれば、この男の侵入を許したのは彼女自身である。見知らぬ男は、暗い死の力に窒息しかけたテナー自身の深い次元に息づく生への願望が呼び込んだ存在であると言えるだろう。ユング心理学的に見れば、これは心の補償作用であり、どこからともなく出現した男は、心が危機に瀕した時に現れ、真の自己に到達するための契機となる異質な存在、女性

を救済へと導いてくれる精神的存在、いわゆる男性的「ロゴス原理」⁷としてのアニムスなのである。

アニムスは一般に女性の夢や空想の中に何よりもまず現実の男性の姿に擬人化されて、すなわち、父、恋人、兄弟、教師、裁判官、賢者、魔法使い、芸術家、医師、哲学者、学者、建築士、僧侶など、精神的能力やその他の男性的特質によって特徴づけられた男性として現れ、「女性の自立的な精神的活動が問題となった時期」⁸に現れるという。また、ユングはその起源は幼児期にあり、「女性の代々積み重ねられてきた男性に対する経験の堆積」⁹と言うが、幼くして女たちの世界で育てられたテナーにはアニムスに投影されるべき強い男性はいない。唯一彼女の記憶にあるのは、父ではなく、教育係の巫女サーが話してくれたカーガッド帝国の歴史の中に出てくる古代の勇敢な魔法使いエレス=アクビ (Erreth-Akbe) である (もともとアテュアンの巫女たちは魔法使いを愚かな者と軽蔑しているのだが)。とすれば、ゲドは原初の魔法使いエレス=アクビに重ねられた英雄ということになる。

しかし、当然のことながら、テナーはすぐにこの正体不明の男を自らの魂の救済者としてすぐに受け入れることはできない。そうするにはあまりに深くアーハという偽りのペルソナに染まりすぎているからである。彼女にとって男は自分の聖なる場所を穢す不敬な侵入者であり、死に値する存在でしかない。だが、その一方で、男がアーハ/テナーに与えた混乱と動揺は大きく、以前にこの暗闇に閉じ込められた3人の囚人 (舌を切られた、すなわち、ロゴスの言説をもたない帝国の反逆者) とは違い、男は深い次元で彼女に作用し、なぜか殺してはならないという思いが沸き起こる。男を地下墳墓に閉じ込めた翌日、アーハ/テナーは男を地上の覗き穴から探しまわり、男が死んだと思うと耐えられない気持ちになり、かつて経験したことのない激しい感情に襲われ、怒りの涙すらこみ上げてくる。

He was there. He must be there. Yet he had escaped her. He would die of thirst before she found him. She would have to send Manan into the

maze to find him, once she was sure he was dead. That was unbearable to think of. As she knelt in the starlight on the bitter ground of the Hill, tears of rage rose in her eyes. (p. 79)

この怒りの涙とは男をみすみす死なせてしまう理不尽さに対する怒りであろうし、その思いは、男は他の者と同じ存在ではなく、自分の生と深く関わる存在だという直感から生じるものであろう。この直感的認識は、この英雄的アニメスが自らの窒息しかけた女性性を回復へと導く力を秘めていることに対する予感を示すものでもある。その予感が彼女を根源的な次元で突き動かす。彼女が男を助けようとするのもその予感に従ってのことであろう。

アーハ/テナーは男をいったん地下墳墓に閉じ込めはするが、その3日後に男が魔法も使えないほど弱りきっているのを知り、彼女は覗き穴から男に呼びかけ、地下迷宮にある「壁画の間」(Painted Room)に行くように指示し、そこまでの道順を教える。この男を助ける行為に彼女自身動揺し、なぜ自分は男に話しかけたのかと思うが、これで覗き穴から食糧と水をおろしてやり、男を生かし続けられると思うと安心する。

地下世界はテナーの生を閉ざす牢獄の記号ではあるが、同時にやがてその牢獄を切り裂いて出て行く力を宿すテナーの「子宮」¹⁰の象徴でもある。であれば、この男は彼女が自らの心(サイキ)＝子宮に産みに産み落とした新しい異質な力であり、いま彼女を動かしているのはこの英雄性を秘めた異質な存在を産み育てようとする無意識的直感の行為であると言えよう。

アーハ/テナーが男を見殺しにしなかったのはこの墳墓を守る聖なる巫女としてのアーハに課された務めを裏切る行為である。彼女は即座に男を殺すこともできた。むしろアテュアンの墳墓の巫女としてはそうすべきであった。それが地下の闇に生きる名前を持たない死霊たちに食されたアーハの存在意義でもある。彼女はより大きな苦しみを与えようと一思いに男を殺さず、自分が男に対する生殺与奪の力を有しているのを確認しつつ、生きながらえさせて、「不滅の者たちの墳墓」を蔑すればどうなるか思い知らせてやるという思いを抱く。

しかし、そう思いながらも彼女は、その実、男を助けてもいるのである。その行為は、強要されたペルソナのアーハ以上に強い力で彼女の内に響いてくる抑圧されたテナーの叫びであり、エロスを求める内奥の声の現れでもあろう。ただし、抑圧され、弱体化したテナーは男を完全に信頼しているのでもなければ、自分の思い通りに動かせるとも思っていない。むしろ、男を恐れている。たとえば、男が杖の光を彼女に近づけようとするると彼女は即座に覗き窓の蓋をしてその眼差しを遮るのも男に対する恐れの見れである。

アーハテナーが男を殺さなかった理由の一つは男がある種の力を秘めているのを知ったからである。その力とは、男の杖（明白なファロスの記号）¹¹が放つ光であり、それが見せる事物本来の姿である。アーハテナーが地下墳墓が宝石でできた美しい空間であることを初めて知るのも男の杖が放つ青白い光の乱反射によってである。

It was jeweled with crystals and ornamented with pinnacles and filigrees of white limestone where the waters under earth had worked, eons since: immense, with glittering roof and walls, sparkling, delicate, intricate, a palace of diamonds, a house of amethyst and crystal, from which the ancient darkness had been driven out by glory. (pp. 68-69)

突然目の前に映し出されたその美しさにアーハテナーは驚くが、それは、自分の心の世界が美しい光を宿す可能性を秘めた空間であることを知った驚きに他ならない。いわば、自己の本質に対する啓示的直感認識である。彼女は自分のサイキの可能性と本来あるべき真の姿に期せずして直面したことになる。この光景が眼に焼きついて離れないのもそのためである。

2. アーハテナーの教育

アーハテナーは男に行かせた壁画の間ではじめて男と顔を合わせる。二人はその後この部屋で会い、彼女は食事を男に与え、衰弱した男に本来の力を取

り戻させる。それは自分の心に生まれた男性的ロゴスを育んでいく行為であり、生の深みからの要求に答えたものだろう。次第に男は回復していき、彼女は男に対する好奇心から多くの質問をし、男は彼女を知の世界に導いていく。アニムス＝ゲドによるアーハテナーの教育の始まりである。内海に浮かぶ島々のこと（この世界には160の島があり、4つの海域に別れていてハヴナー（Havnor）がその世界の中心で、そこには白い大理石の塔が聳えており、その尖塔にはエレス・アクビの剣が飾られていること）、エレス・アクビとは何者か（竜と戦った古代の英雄的賢者である）、竜王（dragonlord）とは何か（竜と話せる者で、竜を支配する者ではない）、竜は言葉話すのか（竜は「太古の言葉」を話す）、アテュアンに竜はいるか（カーガッド帝国に竜は何百年間も存在していないが、ハーラットハー [Hur-at-Hur] の島にはいるらしい）等々、男は世界について教える。しかし、アーハテナーはそれを聞いて「私を愚か者だと思わせ、怖がらせるための作り話だ」と言って拒絶し、さらに「自分は何も知らない、知っているのはこの地下の夜だけだ」と憎悪の感情を露わにする。

ここでは、男の知と女の無知、光の世界における男の経験と閉ざされた暗黒空間での女の未熟さ、内なる瞑想と外なる行為が対比される。広い世界についての男の話はアーハテナーに自分の無知を意識させ、いやしくも権威ある聖なる巫女である彼女の自尊心を傷つけ、怒りと反感を生む。しかし、自己の牢獄からの解放と生の充実を求める願望ゆえにアーハテナーは、抵抗しながらも、男の言葉を少しずつ受け入れていく。結果、彼女は毎日の勤めが次第に空虚なものに思え、自分が「巨大な畏」に捉えられているという認識を深めていく。

ユングは、アニムスとは「女性の無意識に潜む判断を下す理性的（ロゴスの魂）」¹²と定義し、それを受けて、彼の妻 E. ユングはアニムスを端的に「ロゴス原理」¹³と呼ぶ。ユングは次のように言う。「アニムスはまた、生産的で創造的な存在でもある。もちろん、男性的な創造とは形が異なり、アニムスがもたらすのは、ロゴス・スペルマティコス（種子的ロゴス）、生産的な言葉とも呼ぶべきものなのである。」¹⁴また、男の「種子的ロゴス」はその男性性と結びつく。彼女が男と言葉を交わしたとき何よりも彼女の心に残ったのは深く

よく響く男の男性的な声であった。その声に潜む男性のセクシュアリティが理性的言説と結びつき、ゲドを信頼するに足る導きのアニムスとしていく。その声と言葉が窒息しかけていた彼女のエロスを呼び起こし、やがてアーハテナーを包んでいる固い繭を男性的な力で切り開いていくことになる。

男の言葉を未だ信用できないアーハテナーはその力の証拠を求めるかのように、男に魔法を使って見るに値するものを見せよと命じる。男はしばらく手を見つめるが何も起こらず、彼女は、この男はやはり何もできない嘘つきだと思い、失望して立ち上がろうとすると、彼女の着古した黒いマントが空色の絹の服に変わっており、それが膨れて柔らかい輝きを放つものを見て彼女は驚く。

... 'Well,' she said at last, and gathered her skirts together to rise. The wool rustled strangely as she moved. She looked down at herself, and stood up in startlement.

The heavy black she had worn for years was gone; her dress was of turquoise-colored silk, bright and soft as the evening sky. It belled out full from her hips, and all the skirt was embroidered with thin silver threads and seed pearls and tiny crumbs of crystal, so that it glittered softly, like rain in April. (p. 106)

男が力の証明として見せる彼女の服の変化は単なる証明以上の意味を持つ。男は、アーハテナーが仮死の状況にあることを表象する黒いマントを消し去り、彼女の生に潜む本来の輝きを幻として見せるが、それは、男が「私は君に君自身を見せた」(I show you yourself.) というように、洞窟の美しい宝石と同じく、彼女の本来の姿のヴィジョンであり、女性としての開花の潜在的可能性なのである。ゲドによるアーハテナーの教育は、そのようにして、自己と世界に対する認識の変化をもたらす種子として作用していく。

アーハテナーはその後、野心家で猜疑心の強い高等巫女のコシルからゲドを隠すために地下迷宮の最も奥まったところにある大宝物の間へ連れて行く。なぜ、彼女は宝物の間を選んだのだろうか。そこは彼女がそれまでまだ機が熟

さないという理由で入るのを先延ばしにしていた部屋である。コシルの目から男を隠すのに最も安全な場所というだけではない理由がある。

地下迷宮の最深部にある大宝物の間とは、すなわち、テナーのサイキの最深部でもある。であれば、そこにいかなる財宝をも凌ぐエレス-アクビの割れた腕輪の半分が保管されているのも当然である（残りの半分はゲド自身が身につけている）。それこそが何よりも価値のある宝物である。それは、ゲドの持つ片方と結合して一つになれば、多島海世界に平和と均衡をもたらすという力を秘めた腕輪である。その欠けた腕輪はまたテナーの損なわれた女性性の象徴、あるいは処女性の象徴でもある。それは、ちょうどエレス-アクビの欠けた腕輪がゲドが身につけている腕輪の残り半分と一つになって初めて世界を修復していくように、男性のセクシュアリティに触れて初めて発動し、彼女の枯渇した生を修復していく契機となるものである。とすれば、男はテナーの女性性回復のためには早晩この部屋へ招き入れられなければならない。しかも男がそれに値する力を持っていることはすでに証明済みである。つまり、テナーが自らの未来を男性的魂に委ねる機は熟したのである。そして、その男性的ロゴスとの象徴的融合は当然この大宝物の間＝サイキの中心でなされなければならない。それがなし遂げられるとき、そこを出ていく彼女にゲドが「気をつけて、テナー」（Take care, Tenar.）と言うように、彼女はもはや偽りのペルソナとしてのアーハではなく、本来のテナーとして生き始めることになる。

3. アーハ/テナーの混乱

ゲドを大宝物の間に移した日の夜、テナーは魂の再生を暗示する夢を見る。壁画の間に描かれた人間の手足と顔を持つ鳥たち——「名もなき者たち」によって貪り食われ、生まれ変わる事のない者たち、その1羽が彼女に近づき、“Tenar” と呼びかけるが、さらに恐ろしい夢が続く。

... She dreamt of the souls of the dead on the walls of the Painted Room, the figures like great bedraggled birds with human hands and feet and

faces, squatting in the dust of the dark places. They could not fly. Clay was their food and dust their drink. They were the souls of those not reborn, the ancient peoples and the unbelievers, those whom the Nameless Ones devoured. They squatted all around her in the shadows, and a faint creaking or cheeping sound came from them now and then. One of them came up quite close to her. She was afraid at first and tried to draw away, but could not move. This one had the face of a bird, not a human face; but its face was golden, and it said in a woman's voice, 'Tenar', tenderly, softly, 'Tenar'.

She woke. Her mouth was stopped with clay. She lay in a stone tomb, underground. Her arms and legs were bound with grave clothes and she could not move or speak.

Her despair grew so great that it burst her breast open and like a bird of fire shattered the stone and broke out into the light of day – the light of day, faint in her windowless room. (pp. 115-16)

この夢は、テナーが無意識という地下に埋められて本来の生が石棺の中で窒息しかけ、身動きが取れずにいる絶望的な現在の存在状況を示すものである。しかし、その状況にあって、彼女の中にかすかに残る母の記憶（金髪は母の愛情と温かい家庭の記号である）が蘇り、本来の自己を表す名前呼びかける。この夢が「気をつけて、テナー」という昨日のゲドの言葉によって引き起こされたことは間違いない。石棺を打ち砕いて朝の光の中に飛び立つ火の鳥のイメージはテナーが今後自己回復への道を歩き出すことを暗示するものである。二重の夢から覚めた後、彼女は外に出て、天水桶のところで腕と頭をつめた水に浸し、空を見上げると一羽の鷹が朝空を旋回している。それを見て、彼女は「私はテナー」とつぶやき、自分の名前 (Tenar) を取り戻したことに喜びを抱く。彼女が空腹を覚えるのも心身の健全性の回復を示すものである。

テナーが生きてきた地下迷宮の象徴的意味もそこにある。神話学者ケレーニ

イは、迷宮とは死をかいくぐって無限に至る一本の線であり、やがては再生につながる元型的象徴と捉える。彼は「迷宮の研究」の中で次のように言う。

有史以前の大多数の螺旋装飾が墓堂、石棺、副葬品などを装飾していたことを考えていただきたい。そこには当然のことながら死の観念が支配していた。死の観念はおそらく、それが螺旋曲線によって表現された形式において、すなわち人生行路のつぎの生を指示する旋回として、有史以前時代の文化全体を支配していたのである。¹⁵

アーハ/テナーを閉じ込めている地下迷宮は彼女の生を蝕む死の力であると同時に、それを突き抜けた先に広がる新たな生へと導いていく再生の元型的象徴空間でもある。

しかし、テナーという人格が目覚めたとはいえ、アーハというペルソナが容易に消え去ることはない。現世の権力欲に憑かれたコシルが「名も無き者たちはただの影に過ぎず、もはや力を持たない」と太古の力を蔑ろにすると、彼女は怒りを覚え、アーハという社会的・政治的ペルソナが未だ強く彼女の心の深部に根付いていることを意識せざるを得ない。その結果、彼女は、自分はアーハかテナーかというアイデンティティの混乱に陥り、「私は何者か？」と疑問に襲われ、テナーは自立を阻むアーハとの対決を迫られる。

男を生きながらえさせていることは、暗黒の霊たちに仕えるアーハからすれば、彼らに対する瀆神行為であり、神聖な霊たちを裏切ったという思いがアーハを苦しめる。しかし、それ以上に彼女を苦しめるのは「名もなき者たち」への信仰の揺らぎである。それは、明かりをつけてはならない地下墳墓にコシルがランプを持って入ったのにもかかわらず、彼らは彼女を殺さなかったことに由来する。「名もなき者たち」はこの墓所で彼女に権威と生の意味を与える究極の基盤であった。それが無力であるということは、すなわち、アーハというペルソナの崩壊を意味する。彼女は「彼らはもういなくなり、私はもはや聖なる巫女ではない」と言うように、それまで自分を支えてきた「名もなき者たち」への信仰が根底から揺らぎ、同時にこれまで自分が生きてきたアーハというペ

ルソナが崩れかけていることを知る。否が応でもアーハテナーは一人の女性として自らの心の内面を見つめざるを得なくなる。

Identity crisisに陥ったアーハテナーはその内面の分裂と混乱に耐え切れず、突然泣き出してゲドに「自分はテナーではない、自分はアーハではない。神々は死んだ」と訴える。理性的判断へと導くのを本質的機能とするアニムス=ゲドは、アーハが仕えてきた「名もなき者たち」の正体を男性的・理性的言説で定義し、彼女の自己認識に向けて、取るべき道を示唆する。「名もなき者たち」とは「光が生まれる前の大地に潜む太古の聖なる力」で、「不死の存在だが、神ではなく、人間の崇拜に値しない」と彼女に言い聞かせる。

Did you truly think them dead? You know better in your heart. They do not die. They are dark and undying, and they hate the light: the brief, bright light of our mortality. They are immortal, but they are not gods. They never were. They are not worth the worship of any human soul. (p. 128)

さらに、「彼らは創造する力を持たず、破壊するだけ」で、人間が彼らを崇め、その力に身を落とすとそこに悪が生まれると論じ、コシルはずいぶん以前にその力に触れて、魂を失ってしまったがゆえに真実を捉えることができず、彼らは死んだと考えているのだと教える。そして「その力は確実に存在する。だが、彼らはあなたが仕えるべき主人ではない」と言い、死の力への彼女の心理的固着を引き剥がすために、「名もなき者たち」の本質的破壊性を説いていく。

ゲドはコシルとは違って名もなき者たちの存在を否定しない。世界の本質を光と闇の均衡と捕らえ、自ら死との対決を経験したゲドからすれば、死は実在する力なのである（第3巻において、ゲドは、若き日のハヴナー王レバンネン（Lebannen）とともに死の世界である「乾いた地」（the dry land）をくぐり抜けることになる）。死の力の実在を認めることで、これまでのアーハ/テナーの生は、たとえ間違っていたとしても、世界の本質に触れていたことにおいては決して無意味ではなかったことをゲドは認識させる。

テナーの教育の最後の仕上げは、彼女の存在の意味を彼女に認識させることである。なぜ私の名前を知ったのかと尋ねるテナーにゲドは、名前を知ることが賢者 (mage) としての自分の仕事であり、どのようにしてかは言えないが、「君は闇にくるまれ、闇に覆われ、暗い場所に隠されたランプのようだ」と言っていて、彼女の存在の本質を比喻で示す (比喻以外では語れまい)。

... he hesitated a moment. 'You are like a lantern swathed and covered, hidden away in a dark place. Yet the light shines; they could not put out the light. They could not hide you. As I know the light, as I know you, I know your name, Tenar....' (p. 130)

これは先にゲドがアーハ/テナーに彼女自身の姿を幻として見せたことに呼応する箇所である。彼女の本質は光のうちにあり、今はその光が消えた状態にあることを教え、彼女の本来のあるべき自己に対する認識を促す。アニムスの施す教育とは世界と自己に対する見方を深めることであるが、選択は本人に委ねられる。ゲドは「再生における産婆として機能する」¹⁶に過ぎない。新たな生の選択は彼女自身の個としての意志に委ねられなければならない。

4. 選択と決断

ゲドは大宝物の間に閉じ込められている間にそこにある櫃を開けて、探していた護符の片方、すなわち、エレス-アクビの割れた腕輪を見つけており、その護符としての腕輪の秘密を知りたがるテナーに知っている全てを教える。かつては「麗しきエルファーラン」(Elfarran the Fair) が身につけ、やがてエレス-アクビの手に渡ったこと、硬い銀でできていて、内側に力を秘めた9つの古代神聖文字が刻印されているが、半分に割られたために一つの文字が破壊され、「絆の神聖文字」(the Bond-Rune) と呼ばれるその文字は、国々を結びつける力を秘めているということ、その文字が失われて以来このアースシー世界には争いが絶えないことなどを教え、その損なわれた護符 (割れた腕輪) を託さ

れた彼女が外なる世界の運命と潜在的な関わりを持っていることを暗示する。

秘密を教えてくれたゲドにテナーも自分がどうして聖なる巫女に選ばれたかなどこれまでの生涯を打ち明ける。しかし、今でも「名もなき者たち」の力を信じているかというゲドの問いかけに彼女は答えず、暗闇が怖いと言う。最後にゲドは彼女に、ここにとどまるかそれともここを離れるか、すなわち、アーハとなるかテナーとなるか、どちらかを選ばなければならないと選択を迫る。

He answered softly. 'You must make a choice. Either you must leave me, lock the door, go up to your altars and give me to your Masters; then go to the Priestess Kossil and make your peace with her – and that is the end of the story – or, you must unlock the door, and go out of it, with me. Leave the Tombs, leave Atuan, and come with me oversea. And that is the beginning of the story. You must be Arha, or you must be Tenar. You cannot be both.' (pp. 137-38)

これに対し、彼女はここを離れたら、「名もなき者たち」に殺され、自分は死ぬめと言うと、男は「死ぬのはアーハだ」と言い、「生まれ変わるためには死ななければならない」と再生の秘儀を説く。さらに二人の間の信頼を強調し、その証しとして彼は自分の本当の名を教える。また、自分が大宝物の間で見つけた割れた腕輪（すなわち、アーハテナーに託された宝物）を彼女に渡し、それとアーハテナーが首に下げたもう片方の割れた腕輪（これより先に彼女がゲドから取り上げていたもの）を彼女の掌の上で合わせて「完全な全体」(it looked whole)になる様を見せる。それを見て、テナーは「あなたと一緒に行く」と決断を下す。

修復された腕輪をテナーの腕に通すとぴたりとはまる。それは「ゲドとテナーの信頼に満ちた結合の強力な象徴」¹⁷ではあるが、同時にそれを腕にはめるテナーの行為は、彼女が自らの魂に潜み、自らを導く男性原理アニムスを自己の中に統合し、それと調和を保って行動に向かうことを示す身振りでもある。同時に、この修復された腕輪はテナーの女性性回復の記号でもあり、さらにそ

それは彼女に新たなペルソナを付与することになる。この腕輪がかつて麗しきエルファーランの腕に通されていたものであれば、今やそれを腕にしたテナーはエルファーランの蘇りとしてのペルソナを帯び、腕輪に秘められた力で世界に平和をもたらすことが彼女のこれからの社会的・政治的使命となる。個人の次元における魂の再生が世界の再生と重なるのである。テナーは、闇・無意識・破壊・死・周縁・停止した時間・女たちの情念などに特徴付けられた存在状況から光・意識・創造・生・中心・歴史生成の時間・男性権力の空間へと自らの意志で乗り出すことになる。

テナーがゲドとともに死の領域を捨てる道を選択したことは、アーハという死のペルソナを捨て去ることを意味すると同時に新たな生へと導くアニムス=ゲドに身を委ねたことを意味する。テナーの決意がなければ、ゲドもこの地下迷宮から脱出することができず、彼女のアニムス（男性的ロゴス）もまた無意識の世界に深く埋め尽くされて、永遠に開花することなく死の状態に閉ざされていたことになる。アニムス=ゲドに従う選択をしたがゆえにテナーは個性化の道を歩き出し、彼女のアニムスもまた正しく機能し、生の領域で生きる¹⁸ことが可能となる。それは、また彼女のエロスの発動の契機ともなる。テナーはゲドがその手を彼女の手に重ね合わせるとき狼狽と恐れを覚える。

When she said that, the man named Ged put his hand over hers that held the broken talisman. She looked up startled, and saw him flushed with life and triumph, smiling. She was dismayed and frightened of him. (p. 140)

テナーが顔を赤らめ、狼狽するのは本来の自分の生を回復する導き手となるたくましい男性との身体的接触によって発動された彼女の健全なエロスの現れであろう。しかし、それはいまだ未熟なエロスであり、多くの不安とないまぜになっており、テナーはそれを十分に制御することができない。

5. 過去の精算——自由の重さ

地下迷宮からの脱出は困難を極めるものであった。ゲドが持てる魔法のすべてを使って対抗しているとはいえ、迷宮全体に地が震えるような低い不気味な轟音が響く。二人を死の暗黒へと引きずりおろし、呑み込もうとする力が意志の自立を阻む無意識の巨大な力として動き出すのである。また、脱出する際¹⁹、それまで蜘蛛の巣のように入り組んだ暗黒の迷宮を迷わずに歩くことができたテナーが道に迷うという事態が生じる。これは、それまで深く馴染んでいた無意識の領域が馴染みのない他者の空間に一変したことを示すものだろう。

それでも二人は何とか無事に地下迷宮から外の世界に脱出する。二人は、大地の亀裂に呑み込まれていく墳墓を後にして、二人は西の山を超え、ゲドの船 *Lookfar* 号で海に出て世界の中心ハヴナーを目指すことになる。山超えの途中でテナーは奇怪な夢を見はするが²⁰、黄金の光と広い自然の中で目覚め、「甘美な思い」を味わい、新生の喜びを全身で感じる。しかし、その高揚した気持ちりは長く続かず、落ち着くにつれて気分は沈み、新たな心理的危機がテナーを襲う。彼女を襲う危機は未来と過去の二つの方向からくる。

危機の一つはアニムスとの同化への心的傾斜である。テナーは新たに踏み出した世界に対する無知や経験の乏しさ——彼女が知っているのは砂漠と墳墓のみ——ゆえに未来に漠とした不安を抱いているが、その不安が大きくなるにつれて、未来から目を背け、彼女の内に発動を始めたエロスの衝動と結びついて現在という時点でアニムス=ゲドとの同化へと向かう。無知の不安に耐え切れなくなって、彼女は山の中で一緒に住んでもらえないかとゲドに持ちかける。ゲドは、自分は呼びかけに応じてどこにでも行くが、長くとどまることはできないとテナーの願いを退ける。

ゲドはテナーが女性として自立し、一度は消えたランプに再び明かりが灯り、幸福へと導く存在であり、決して永遠に一緒にいる存在ではない。ゲドとともに暮らすこと、すなわち、アニムスとの同化はその中に自己を見失うことであり、真の意味での自立ではない。ここにアニムス依存の危険が潜む。アニムス

は女性の中であって自己を導く理性の声であるが、自己ではない。それに呑み込まれれば、自己を失うことになる。E. ユングは「アニムスによって呑み込まれる代わりに、アニムスから自分を区別し、アニムスに対抗して自分を堅持することに成功するなら、アニムスはもはや危険どころか創造の力となる」²¹と言う。ゲドは「君はやがて私を必要としなくなり、幸福になる」と未来に対する確言を与えてアニムスからの自立を促す。また、テナーの望みは彼女の中で発動を始めたセクシュアリティの発現でもあるが、ゲドは未熟な次元でのセクシュアリティの満足を拒否する。それは正しい心の修復ではないからだ。

今一つの危機は罪の意識からくる自己処罰の誘惑である。短時日の内に起こった大きな変化であっただけに、テナーには過去に対する精算が十分になされていないという負債の気持ちが強く残っている。すでに人格の一部になっていたアーハを捨てたこと、また自分を大事にしてくれた宦官マナンの死に対する罪の意識ゆえに罰を受けなければならないという思いが生じる。その結果、捨てたはずのペルソナであるアーハへの一時的な退行が起こる。また、ともに暮らそうとしないゲドに対する不信が生じ、ゲドはエレス-アクビの腕輪を盗む目的を果たし、もはや自分を必要としていないと思い、自分は騙されたのだという疑念と怒りに襲われる。

He had made her follow him. He had called her by her name, and she had come crouching to his hand, as the little wild desert rabbit had come to him out of the dark. And now that he had the ring, now that the Tombs were in ruin and their priestess forsworn forever, now he didn't need her, and went away where she could not follow. He would not stay with her. He had fooled her, and would leave her desolate. (pp. 169-70)

その結果、ゲドを亡き者にして、「彼ら」のもとに戻ろうという衝動にかられ、自分が見捨てた「彼ら」はゲドという生贄を受け入れてくれるだろうと思う。しかし、それは過去への退行であり、未来へと彼女を導くアニムス=ゲドが許すところではない。ゲドは彼女にあなたは「悪の器」(the vessel of evil)であったと説き、「君は光をかかげるために作られた」とテナーがこの世に存在することの意味について説得する。

'Listen, Tenar. Heed me. You were the vessel of evil. He evil is poured out. It is done. It is buried in its own tomb. You were never made for cruelty and darkness; you were made to hold light, as a lamp burning holds and gives its light. (p. 177)

さらに、ゲドはテナーによって古い悪は無に帰し、彼女によってこわれたものが完全になったと説き、彼女に課された新しい創造の社会的ペルソナをこそ生きるべきだと強調する。これはアニムスの4つの発展段階における「最後の段階としての意味」²²の次元におけるアニムスの最終的導きに相当するものであり、存在の意味を深く認識させることでアニムス=ゲドの導きは終了する。

過去の精算をしてくれるのはテナーが流す涙である。二人はゲドの舟で海に乗り出し、墳墓の島を後にする。ゲドは完全に離れたと言い、彼女もそう感じるが、喜びはなく、自由になったがゆえの痛みを耐えかねて泣き出す。それは、彼女がつらい選択の果てに自ら選んだ「自由の重さ」(the weight of liberty)を学んだことを示す涙である。ゲドは慰めの言葉をかけず、思いっきり泣かせる(このあたりゲドはすぐれた心理療法家でもある)。テナーの泣く行為は、流す涙とともに古い自己を洗い流す象徴的行為であり、その涙が感情的次元で過去を清算し、過去の自己との最終的な決別を可能にしてくれるのである。

What she had begun to learn was the weight of liberty. Freedom is a heavy load, a great and strange burden for the spirit to undertake. It is not easy. It is not a gift given, but a choice made, and the choice may be a hard one. The road goes upward towards the light; but the laden traveler may never reach the end of it. (p. 172)

涙とともに古い自己を洗い流した後、テナーが学ぶのは闇の意味の変化である。それを可能にしてくれるのがこの広い世界を包む夜の闇である。二人を乗せた Lookfar 号がカレゴ=アット (Karego-At) 島を過ぎ、西に進む途中、テナーは夜の世界を覆い尽くす果てしない広大な闇をみつめる。

In the boat moved by magic over the great deep, the girl lay looking up into the dark. All her life she had looked into the dark; but this was vaster darkness, this night on the ocean. There was no end to it. There was no roof. It went on out beyond the stars. No earthly Powers moved it. It had been before light, and would be after. It had been before life and would be after. It went on beyond evil. (pp. 173-74)

この世界を包む闇はアーハが知っていた闇よりもはるかに大きく無限で、永遠の闇であり、光よりも生よりも先にあり、人間の善悪を遥かに超えた永遠の神秘の闇であることに思いをいたす。この闇の質的变化に対する認識がアーハの闇を相対化し、新たな次元に位置づけるのである。それによってアーハという暗黒に馴染んだ彼女の古いペルソナは、切り捨てられることなく、新たな、そしてより大きな次元でテナーの自己の中に統合されることになる。

二人は無事にハヴナーの港に到着し、群衆が歓呼の声を上げて二人を迎え、テナーを「白い淑女」(White Lady)として讃える中、彼女は腕輪をはめた右腕を高く上げてそれに応える。あたかも「麗しきエルファーラン」の蘇りであるかのように。しかし、ゲドに引かれてハヴナーの通りを歩いていく時のテナーは家に帰る子供のようにしかない。

テナーはゲド=アニムスの導きによって暗い死の力から解放されたとはいえ、彼女の心が完全に修復されたわけではない。一度は彼女の生を抑圧し支配した闇の力、彼女に巢食ったアーハというペルソナは完全に払拭されたわけではない。おそらくアーハという人格は生涯テナーの意識生活に影として揺曳し続けるだろう(事実、彼女は50代半ばになってからも依然として「名もなき者たち」に食される巫女の蘇りの儀式の模様を夢に見る²³⁾)。テナーの個性化の過程は緒についたばかりである。彼女の魂は多くの傷を負っており、彼女はこれから長い時間かけてゲドの師オジオン(Ogion)という老賢者のもとでゆっくりと魂の修復を行い、自らの消えたランプに新たな光を灯された後、光の世界で新しいペルソナを生きることになる。

注

1. ル=グウィンのアースシー物語は、第3巻『最果ての岸辺』(*The Farthest Shore*, 1972)が完成して3部作完結だと思われていたところ、18年後の1990年に第4巻『テハヌー』(*Tehanu*)を発表し、さらに2001年には第5巻短編種『アースシーの物語』(*Tales from Earthsea*)と第6巻『もう一つの風』(*The Other Wind*)を発表して人々を驚かした。ル=グウィンは第6巻のあとがきで、この6冊を3部作とも6部作とも、またシリーズ(連作)ともサイクル(物語群)とも考えず、ただ「アースシー」(*Earthsea*)と考えるとしている。あらかじめ大きな計画のもとに小説を書いていくということのないル=グウィンは、自ら創造したアースシー世界を探検していくうちに新たな物語を見出し、それを紡いでいくうちにこの6つの物語が形を成したと考えるほうが適切だろう。
2. Ursula K. Le Guin, "Dreams Must Explain Themselves," *The Language of the Night* (London: The Woman's Press, 1989) p. 44.
3. C. G. ユング (林 道義訳) 『個性化とマンダラ』(東京: みすず書房、2005) p. 49. 別の著作で、ユングは個性化とは「自分自身の自己となること」と言い、さらに「個性化の意味するところはただ、個人に与えられた定めを実現するに至る心的発達過程であって、換言すれば個人が本来そうであるように定められた個性的な存在へと至る過程なのである」(『自我と無意識』p. 84) と言う。
4. Elizabeth Cummins, *Understanding Ursula K. Le Guin* (University of South Carolina Press, 1993) p. 40.
5. Ursula K. Le Guin, *The Tombs of Atuan* (New York: Atheneum Books for Young Readers, 2012) p. 2. 作品からの引用は全てこの版による。以下、引用文には頁数のみを示す。
6. Le Guin, "Dreams Must Explain Themselves," p. 44.
7. E. ユング (笠原 嘉・吉本千鶴子訳) 『内なる異性 — アニムスとアニマ —』(東京: 海鳴社、1997) p. 24.
8. E. ユング 『内なる異性 — アニムスとアニマ —』 p. 44.
9. C. G. ユング (松代洋一・渡辺学訳) 『自我と無意識』(東京: 思索社、1988) p. 138.
10. Jannine Jobling, *Fantastic Spiritualities* (London: T&T Clark International, 2010) p. 54.
11. ル=グウィンが言うように、彼女自身は意識していなかったようだが、この作品は元型的な性的記号がテキストを織り上げている。
12. C. G. ユング 『自我と無意識』 p. 135.
13. E. ユング 『内なる異性 — アニムスとアニマ —』 p. 24.
14. C. G. ユング 『自我と無意識』 pp. 138-39.

15. カール・ケレーニイ (種村季弘・藤川芳郎訳)『迷宮と神話』(東京: 弘文堂、1973) p. 83.
16. Cummins, *Understanding Ursula K. Le Guin*. p. 42.
17. Jobling, *Fantastic Spiritualities* p. 57.
18. ジェンダーの問題にこだわるルネグウィンには後にこの作品につけた「あとがき」(2012)で、当時ジェンダーは共に存在することで初めて互いが自由になれると考えていたと言う。

Certainly Arha/Tenar would better satisfy feminist idealists if she did everything all by herself. But the truth as I saw it, and as I established it in the novel, was that she couldn't. My imagination wouldn't provide a scenario where she could, because my heart told me incontrovertibly that neither gender could go far without the other. So, in my story, neither the woman nor the man can get free without the other. (Le Guin, "Afterword," *The Tombs of Atuan*. p.186.)
19. この地下迷宮から脱出する途中、それまでアーハ/テナーの親代わりになって彼女を大切にしてきた宦官のマナンが二人の後を追い、底無しに虚無に落ちて死ぬことになる。なぜマナンは死ななければならなかったか。マナンはテナーが身近に接していた唯一の男性ではあるが、テナーの女性性を回復するアニムスにはなりえなかった。若いテナーを救済するには、その若さに呼応した英雄性を秘めた力強い男性でなければならないからである。老いた宦官のマナンは半男性であり、力も叡智も持たない彼はテナーの中にわずかに息づく未発達のアニムスでしかなかった。ゲドの出現によって完全なアニムスが彼女の中に創造されたとき未熟なアニムスは捨てられなければならないのである。
20. たとえば、テナーは、自分の体からすべての肉が削げ落ち、腕の白い骨が闇に鈍く光るという悪夢を見る。テナーの中にあって彼女を支配してきたアーハというペルソナが消滅していく姿であろうか、それとも裏切った「暗黒の霊たち」から罰をうける将来のテナーを暗示するものだろうか。いずれにしろ、この夢はそれまで自らが生きてきたアーハを捨てたことに対する罪の意識と、それゆえに罰を受けなければならないという自己処罰の思いが呼び起こしたものであろう。
21. E. ユング『内なる異性 — アニムスとアニマ —』p. 60.
22. E. ユングはロゴスの4つの段階として力・行為・言葉・意味をあげ、その段階はアニムスの発展にも投影されると言う。「第一の段階は力であり、それに行為と言葉がつづき、そして最後の段階として意味がある」(『内なる異性 — アニムスとアニマ —』p. 9.)
23. Le Guin, *The Other Wind* (New York: Houghton Mifflin Harcourt, 2012) pp. 219-20.